

能登半島地震から1年8カ月

県内の災害ボランティアが、能登半島地震の津波で被災した写真の保存・修復に取り組んでいる。海水に漬かって傷んだアルバムに収められていたのは、子どもたちの成長記録や旅先でのスナップなど、大切な思い出が詰まった写真ばかり。地震の発生から9月1日で1年8カ月となるが、その後も被災者も重なる被災地の復興は思うに任せない。一枚でも多く、本来の状態に近づけて被災者の元へ届けようと、ボランティアらは今月31日にも作業する。

「4月から取り組んできた修復作業も、今日から大詰め。写真の状態を仕上げた上で、一枚一枚、アルバムに収めていきますよ。」

今月3日、川崎市総合福祉センター（同市中原区）の一室。集まった約10人のボランティアに、多摩川災害支援チーム（チームたま）の金高のり代表（44）が呼びかけた。活動の中心メンバー、大久保卓（55）が注意を促す。「写真を拭いてアルバムに入れる際は、指が入れ替わらないよう気を付けて」。

チームたまが取り組むのは、石川県津波被災者の写真修復だ。2024年の元日に起きた能登半島地震の津波で海水にまみれ、現地の支援団体を経由して託された。

誕生日を迎えた子どもや家族の笑顔、旅先先の風景などを撮った写真は5千枚以上。ボケットアルバムに分けて保管されていたが、浸水によって激しく傷み、画像の一部が欠落し、変色もしていた。

その一枚一枚をアルバムから丁寧に取り出し、さらに劣化しないよう、乾燥や

大切な思い出よ、再び



県内の災害ボランティア 津波で劣化写真修復

洗浄といった保存の工程を経て、この日の作業に臨んだ。田圃紙の裏にも汚れが残っていないか確認を「なるべく写真を乾かし、くっつかないように注意して」。そんな言葉を交わしながら、写真の表面をアルコールで拭く仕上げの作業を行い、元の順番通りに新品のアルバムに収める作業を続けた。

（湯辺 夢）

チームたまは、多摩川上流が記録的な大雨に見舞われた19年10月の台風19号（東日本台風）を機に発足。広範囲に浸水した川崎市中原区や高津区の被災住宅で、床下清掃のボランティアを重ね、住民から預かった写真やアルバムの洗浄にも力を入れている。

これまでに多くの修復を手がけてきた大久保さんは、能登半島地震の被災写真を見ながら「ぬれたまままだとバクテリアが繁殖し、画像が潰れてしまっている。なるべく早く乾かすことが大切だ」。

被災者が住居の復旧や生活再建に追われる中、写真やアルバムの修復は後回しにしがちだが、チームたまのメンバーには「大切な思い出を取り戻す作業も、被災者にとって重要な取り組み」との思いがある。

金高さんは昨年9月の能登半島地震で被災した石川県津波被災者のボランティアグループにも汗を流す。「別の被災者から写真の修復を依頼されることもあると思う。私たちは地元津波被災のことを見つけ、被災した地域のお手伝いをしていきたい」と今後を見据える。

●被災した写真の保存・修復に取り組むボランティアら。3日、川崎市総合福祉センターで海水に漬かり、画像の一部が欠落した写真劣化を防ぎ、アルコールで消毒した

